

平成26年(西暦2014年)11月

瞑想録(そのプレ3)

(2006年7月から2009年4月分)

滝沢 無縛(たきざわ むばく)

本論は私の日々の瞑想の結果をまとめたものです。その瞑想の主題は、東洋思想に基づく「連続体と蓋然論理」です。究極的には科学と対をなすと思っているものですが、科学周辺に位置するものの、科学そのものではありません。学問でもありません、再現性も絶対真も保証しないことを「売り」としているからです。また、瞑想であるという特性上、根拠をこれ以上提示できない言明も含まれています。特に主題以外の部分には、現行の常識では「誤り」とされていることやタブーとされていることも含まれていますが、あくまでも主題を見て下さい。その上で言明を信じるか信じないか、それは読者一人一人に委ねられています。なお、「真理は深いほど簡潔であるべきだ」と言う立場からは、この論集における何十頁ものだらだら書きは、残念ながら私がまだ真理の核心に到達していないことを、如実に表しています。なお、この論集の基礎となる先立つ瞑想録については、下記のサイトを参照してください。

<http://www.geocities.co.jp/bimromav13/>

2006. 06. 28 292

### 1、3つのドつぼ

あらゆる宗教は、「神に似せて人を作った」、「人は天命を知る知恵を有する」、「人には神の愛が表れている」あるいは「人は知恵が有るから人である」などと教えている。

ではどうして人はかくも無知で無力なのであろうか。実験はできてもその理由は説明できない。理論は現実を十分に説明できない。理屈はしばしば現実を上すべる。未来の予測はほとんど当たらない。神の愛は、天命を知る能力はどこに行ったのか。

思うに人が無知にならざるを得ない理由(どつぼ)が3つある。すなわち、①複素のドつぼ、②多体のドつぼ、③非線形のドつぼである。

化学はいまだに実験の学問である。化学反応を予測するのは難しい。これは典型的に複素のドつぼである。化学反応はシュレーディンガーの波動方程式に従う量子現象であるが、人の頭脳は複素数の振る舞いを予測する能力がない。例えば硫黄は、

反応性は弱いのに意外なところで反応を進行させてくれる。

化学反応もそうであるが、もっと典型的に重い核の核分裂反応は典型的な多体問題である。多体問題は3つ以上有るときは解析的な理論解が存在しないことが証明されている。重い核がどう割れるか、誰も想像できない。

最後に非線形のドつぼは、流体力学における移流項に起因する乱流が典型的である。ナビエ・ストークス式上は簡単に記せる非線形であるが、人類の知恵をはねつけ続けている。これからをはねつけ続けるであろう。

さて、これら人類の知恵がここまで愚かにされる(バツフル)これらドつぼは決してなくなるのであるが、しかし古来より、卑弥呼のような預言者あるいはシャーマンは居た。彼らこそ自然と一体化して、超然たる知恵によって見えないものを見る超能力者(seer)であった。今は、最も進んでいるように見えて、実は超能力者の出にくい、歴史上最悪に不毛な時代であると私は思う。

## 2、ゲーデルの不完全性定理の身近なイメージ

今日はゲーデルの不完全性定理の分かったようなイメージ版をお届けします。その前に不完全性定理のエッセンスをこれまた単純に復習しておきますと、Dをある主張(述語論理式)としまして、次のような命題を作ります：

D=「主張Dは誤りである」。

この主張って、大きなものが小さなものに入っているみたいで変ですが、この命題を命題の個々のタームを数値化すると、この命題も数値化(コード化)されます(ノイマン型計算機の原理であるチューリングマシンをご存知の方ならイメージがつかめやすいと思います)。

さて、不完全性定理の土俵では、「数値化される命題はすべて証明可能」です。ですから上記の命題も真か偽のどちらかです(二値論理)。真であるならば、左辺のGは真ですが、一方右辺からGは同時に偽になります。他方この命題が偽なら、左辺のGは偽ですが、右辺からGは真になります。これはいずれにしても矛盾です。そして西洋数学では矛盾は鬼の首ですから、矛盾であるということはこの証明の前提の、「すべての命題は無矛盾な証明体系の中ですべて証明可能である」という前提が間違っていることになります。つまり、どのような完全な体系であっても、その中に真偽を決定し得ない命題が存することになります。これが不完全定理の証明の輪郭です。

とはいえ、身近なイメージがないと数学は論理の塊なので分かりにくいですね。そこで、専門家の反論を覚悟の上で、次のような身近なアナロジーを提示します。セキュリテソフトの一例で、パッチの後の通告を今後も続けて表示するかを尋ねています。問題は「この手の表示を今後しない」にチェックを入れた場合です。二度とチェックは現れません。ところが気が変わってやっぱりこの手の表示を出したくなったとします。でもこの手のウインドウがもはや出ないのですから、この手の内だけで再び表示を出すことはできません。つまり、別途プルダウンメニューとか、PCの他の要素、つまり体系外の手段に頼るしかないのです。

分かりやすく言えばこのもどかしい感じが不完全性定理に近い感じだと理解しています。この議論は更に、神にとっての不完全性定理、5時以上の代数方程式が有限個の式変形で解を求められないことの証明のイメージ化に繋がってくるのですが、この辺はまた別の日に書きます。

### 3、大乘とは「ホラを吹く」こと

年がばれそうだが私がまだ少年のころ、ジョージ秋山さんが描いた「ほら吹き和尚」という漫画があった。大変興味深い漫画で、主人公の和尚がホラばかり吹いて大言壮語するのだが、単なる出まかせのウソではなく、むしろ真理、大きくデフォルメされ強調されたものの真理そのものなのである。弟子である小僧さんとの問答は、知恵にあふれていた。

仏教には大乘系と小乗系があり、日本や中国のそれは大乘系である。大乘とはサンスクリットの「マハーヤーナ」の訳で「大きな乗り物」の意味である。仏陀の入滅後、弟子たちは仏陀の遺言や足跡を忠実に再現しようとして膨大な「研鑽」をした。それが今で言う小乗（長老派）である。

ところがどれだけまねしようと試みても、文字で表せないものをプレイバックすることはできず、結局「極端な修行と道徳」になってしまった。これに対し「仏陀の本質を捉えよう」、もっと言えば「仏陀をも越えよう」という動きが起こり、これが現在の大乗仏教に大成・集約されている。その教えは長老系の教えと対照的に、ある意味厳密を廃し、知恵に満ち、融通無碍である。

だから和尚が悟りを教えるのに「ほら」を以ってするのは大いに意義のあることなのである。知恵は「ほら」においてこそ、最もその威力を発揮するのである。同様にして「一休さん」ものが日本人に広く愛されているのも、その知恵が粹にはまらず広大無辺だ

からである。ここに知恵の本質がある。

この観点からキリスト教を見ると、異端を恐れるあまりに自己を締め付けすぎてしまい、開祖のイエス以降2000年を経たいまだに小乗の域を出ていず、ホラすら吹けない「パウロ教」に留まっているのがなんとも惜まれる。

蛇足になるが、私が研究者の道を歩まなかったのもひとえに、ホラを吹けないからである。

#### 4、5次以上の代数方程式が求解できないことのイメージ

こんばんは。今日で連続3日目の深夜トークです。本来なら毎日規則正しく寝起きして、今までの瞑想で得た悟りを著述していないといけないのですが、どうも不規則になっています。

で、今日(今朝)のメッセージですが、5次以上の代数方程式が解析的な求解を有しないことのイメージ的な説明をいたします。まず、あらゆる代数方程式が複素数の範囲で次元と同数の解を持つこと、これはガウスが証明した「代数学の基本定理」で証明されていますが、本日の主題で無いので詳細は別途にします。だから解はあるのですが、今日の問題はその解が有限回の加減乗除と累乗根の組み合わせで表現できるかという点です。

答えから言いますと、4次以下ならできますが5次以上だと一般的にできません。もっと身近なアナロジーを挙げましょう。任意の角の作図による3等分はできません。これは定規とコンパスによる作図が加減乗除と平方根を取る手続きしかできないところ、角の三等分を理論化すると3次方程式になり、定規とコンパスで三乗根は作図できないから作図不能というわけです。

方程式の問題に戻りますと、加減乗除にあらゆる累乗根を付加したものを「クンマー拡大体」と言うのですが、この上で $n$ 次方程式の解は「 $n$ 次交代群」という代数構造を持ちます。一方累乗根の付加は「 $n$ 次巡回群」という構造を持ちます。ですから求積できるか否かは、 $n$ 次交代群が $n$ 次巡回群の有限回の列に治まるかどうかという問題になります。さて、ここで交代群を解いていくという行為は、もとの群に対して「正規部分群」を取るという行為に該当します。ですから $n$ 次方程式が解けるか否かは、正規部分列が仕舞いに自明群(単位元1個のみの群)に行き着くかどうかという問題になります。そして、4次以下の交代群は行き着きますが、5次以上はあるところから空回りして行き着きません(「可解列が存在しない」といいます)。だから5次以上の代数方程

式は一般的に解析解を持ちえません。以上がアーベル理論です。

以上が標準的な証明ですが、まるで論理の塊で、とてもイメージがつかめません(イメージが無くてもなんとも思わない人が数学者になっていくのですが)。そこで今回もまた、数学者の批判を覚悟の上で、近いイメージを挙げてみましょう。可解列があるときから空回りする(正規部分群が十分自身になってちっとも進まない)とは、解を実際に(解析的に)解こうとする側からは、一種の三つ巴になっていると私は見ます。巴になっているから、どれか一つについて累乗根を取ろう(巡回群を作用させよう)とすると、同時に2つ以上の絡み合った項が出てきてそれらが代数処置を要求します。そしてそれらを解こうとすると、もっとたくさんの処置に負えない項が出てきて困らせます。この連続で、あがけばあがくほど処置に困る項が鼠算的に増加して、ついに手に負えなくなるのです(ところでこのイメージって、素粒子論における重力項の以上発散に似ていますね)。

私は代数方程式の求解という問題について以上のイメージを持っています。言い換えればこれだけ始末に負えない状況を群概念ひとつで解決したアーベルは真の天才だったと言えるでしょう。

## 5、バーチャル禪問答

禪師:では問う。片手でする拍手の音(隻手の音声)とは？

私:(手を回してから心臓の上に置く)

禪師:そうか、片手の拍手が本当に聞こえたなら証拠を見せよ。

私:(手のひらを禪師に向ける)

禪師:片手の拍手の音を聞いた者は成仏しているという。お前の悟りとは。

私:(手で筒を作り、フーッと吹いてパンと言う)

禪師:では死んだ後、お前は片手の拍手の音をどうやって聞くのか。

私:耳で。

禪師:では手が切り落とされたらその音は如何？

私:手はまた生える。何度でも生える。

禪師:なぜだ。

私:宇宙全体に満ちているからです。

禪師:わたしには見えないが。

私:(腕で丸を描く)

禪師:ではその内富士山の頂点にある手とは？

私:(両手で1回大きく拍手)

## 瞑想録（プレ3）

禪師：その音は手の平から出ているのか、それとも甲からか？

私：手の真ん中から。

禪師：片手の拍手の音を聞いたら、人生もうすることはないだろう。

私：アンパンを食べに行きます。

禪師：その音はいつに始まりいつ終わるのだ？

私：開闢より終焉まで。

禪師：その音はどこからどこまであるのか。

私：恒河の向こうから須弥山の果てまで。

禪師：その音を敢えて口に出してみよ。

私：オーム。ムーン。フーン。

禪師：・・・お前を印可する。

## 6、たわごと

今日は平日の奴隷状態から開放されて自由な一日を過ごした。そして満足の内に帰宅し、早めに床についた。寝るという野蛮な行為をするためである。執筆中だった1作目の著作も九分方仕上がり、後は全体構成をするのみで、その意味では明日は何年ぶりの開放日なのだ。吉祥である。私は明日、近々決行予定の、サンフランシスコステイ1週間の計画を練るつもりであった。

しかしながら私は覚醒して寝入れなかった。後顧の憂いが全く無いのに、今まで4時間も布団の中でじたばたしていた。4時間あれば一仕事できるというのに。これが束縛・自由の剥奪でなくてなんであろうか。実際寝られようが寝られまいが、平日の勤務時間を代わりに削り取る方法は無いのだ。非情である。

私は偉大なヨギであるラーマクリシュナ・ビベーカーナンダにこの根本的哲学を尋ねた。彼は今日に限ってつれなかった。「セラビー」と言うと空中浮揚して去ってしまった。仕方ないのでやはり友人でガーベッジマンのシェイク・ナスルディーンに尋ねてみた。彼は実はデルビッシュである。彼は「意味無く生き延びるつらさと、まだ使命がありながら早世するのと、どっちがましか」と逆に問うた。

これは鋭い指摘である。要するにガロアとアインシュタインとどっちをやりたいかというのである。私は「どっちもやりたくない」と答えた。するとナスルディーンは、「この未熟者」と言って消えてしまった。



ところで2時間前にトランキライザーを飲んだのだが、まだ効いてこない。明日は近所に見つけたロシアパン屋にバイクで行く予定だったのに。これをしないで来週のお勤めなど無い。理屈無しにそう決まっているのだ。

私は天を見上げた。すると「マラナタ」という声が聞こえた。そんなちぐはぐなことはありえない。きっと聞き間違いだろう。アインシュタインの5次元電磁場理論はすでに破綻している。彼はこの批判にどうやって耐えたのであろうか。私にはそんな精神力は無い。

太宰君、これは津島君なのだが、絶望に死ぬ直前の波動を送ってくれて、その苦しさを体験させてくれよ。そうすれば私がまだ甘いことが分かるから。終末は整理されてくるのであろうか、それともグチャグチャの中で破滅的に、ほとんど制御不能にやってくるのだろうか。

一つはっきりしているのはこの世の中、新しいことや意外なことはたったの一つもないということだ。福井のじじいが小金をためようが、ノータリンの安倍が首相になろうが、どこかで飛行機が墜落しようが、全部分かっていたことだ。予知能力があるのも不幸だ。

私はもうじき著作が上がる。売れるとは思わないが社会に発信した。であるならもう死んでもいいのかもしれない。それが事故であろうと自殺であろうと、はたまた寿命であろうと。保険金の違いはあるかもしれないが。

がロアは数学を無用物にした。頭の体操にしてしまった。ネガティブなことを言っても仕方ないな。ペレルマンのポアンカレ予想の証明、ざっと見たけど、あれってトポロジーと言うより微分幾何だ。リッチ曲率のフローをトレースしている。これで解決すると言うのは、ある意味トポロジーの未熟さ、幾何を幾何でストレートに攻める手法がないためだが、微分幾何でも解けてしまうと言うことは、トポロジーがまだ固有の領域を確立していないことの裏返しかもしれない。

今妻がトイレにおきてきて、「うるさいから早く寝てくれ」という。西太后の政変で暗殺された時の宰相は、「不承知」と言って首を落とされた。続きはまたにするか。

## 7、天の物は天に、カエサルの物はカエサルに

「天の物は天に、カエサルの物はカエサルに返しなさい」（マタイ22章17節）、これは

極めて有名なイエスさまの「公案」の1つです。この答えはパリサイ人から、「(カエサルが彫が入った)コインを示されて、これをどこに返したら良いでしょうか、先生」と聞かれた時の答えです。

この問題はパリサイ人がうまく仕組んだ引っ掛け問題で、「天に返せ」と答えても「カエサルに返せ」と答えてもチョンボを取られるように仕組まれた「良問」でした。これは実に論理学の問答です。「やぶへび」とかラッセルの逆理とか、あるいはゲーデルの不完全性定理と似た香りがしますね。

はっきり言います。こういう問いにまともに引っかかるようではあなたの信仰はまだ、「パウロ式道徳」の域を出ていません。ところがイエスさん、さすがにユダヤ人の血を引いているだけあって匹夫ではありません。知恵があります。「天の物は天に、カエサルの物はカエサルに返しなさい」と答えました。

つまりよりメタな(抽象度の高い)原則論で答えることにより、解決の下駄をパリサイ人に投げ返しているわけです。パリサイ人は自分に向かって拳骨を振り上げている形になってしまいました。この知恵(ヘブライ語では「ホフマ」と言います)、一休さんの「虎を出してください、捕まえてあげましょう」に通じるところがあるでしょう。古今東西知恵のある人は違います。

もしイエスさんに「片手の拍手の音は如何？」と聞いたならきっと、「右手の音は右手に、左手の音は左手に返しなさい」と答えたことでしょう。さすがはイエス禅師です。パウロのような朴念仁には全く理解不能な知恵です。皆さんもパウロのような愚直な石頭にならないように、イエス禅師の生き様から直接に知恵を学んでください。

## 8、キリスト教がイスラム教を裁けるのか！

どうしても気になっているのがこれです。たしかにイラクのフセインは独裁をしてきました、多くの政敵を抹殺しました。でも彼の罪状と処罰はイスラム法に則り、イスラム教徒の手によってなされるべきではなかったでしょうか。フセイン自身を擁護するつもりはありませんが、彼は最後までイスラムの教えと常識を規範として行動していました。

アメリカがフセインを裁けるのでしょうか。キリスト教がなぜイスラム教の中に土足で入っていけるのでしょうか。私はこの影にアメリカの、もっと言えばキリスト教(実態的にはパウロ教)の「自分たちこそ世界標準」という思い上がりと傲慢さを見ます。今のキリスト教は教祖イエスの教えを離れてはなはだしく傲慢です。



60年前の東京裁判も同様でした。なぜキリスト教が神道や大和思想を裁けるのでしょうか。日本人の後始末は日本人が自らつけるのが正しいのです。アメリカのやり方は形を変えた帝国主義以外の何物でもありません。

おりしも明日は紀元節。実は今腰痛なのですが、明日はそれを押して靖国神社と東京大神宮を参拝してくる予定です。

### 9、フォークソングとマホメット

年がばれそうで恐縮だが、団塊の世代のなつかしのメロディーに「おらは死んだったダー」というフォークがあって、大いに流行った。この歌は人を食ったようなとぼけた歌だったが、その一節に「天国良いとこ一度はおいで、酒はうまいし姉ちゃんはきれいだ」というセリフがあった。

極めて現世利益的なセリフでとても宗教と関係があるとは思えないのだが、実はこのセリフ、イスラム教の経典であるクルアーン（コーラン）でムハンマド（マホメット）が説いている天国像と全く同じなのだ。

汝ら信者たち、神アッラーのために良く喜捨をし、聖戦のため命を捨てよ。さすれば天国においてこの上ない美味しい酒と尽きない食べ物を美しい妖精フーリーの手からとしえに授かるであろう。

クルアーンの随所でこのような表現に出会う。イスラム教はキリスト教よりも600年も後に、キリスト教を踏まえて成立した宗教でありながら、その宗旨は常人が予想もつかないほど利益誘導型である。

にもかかわらず自爆テロに見られるようにイスラムの人々はこの教えに命をかける。これはどういうことであろうか。時代錯誤ではないのか。

そういう一面もあるかもしれない。だがムハンマドの説くアッラーへの絶対服従の教えは、一寸のぶれもなくかつ力強い。この点ではキリスト教（パウロ教）はとても叶わない。かつてフォークソングが若者の心を捉えたのと似た構造がそこにはある。

むしろパウロ教のほうが理念に過ぎすぎていて、なぜ世界の三分の一の信仰を集めているのか不思議なほどだ。信仰は理性でなく情念である。私がコーランを読んだの

はもう20年も前、最近再度読む機会があつて、コーランの力強さを再認識して、こちらこそ真の宗教と見直した次第である。

## 10、米国の失敗の構造ーベトナムとイラク

30年前のベトナムに続いて今度はイラク、米国は本当に懲りない国だ。世界の自由を守るためとか称して、聖戦よろしく、ドンキホーテまがいにむやみに攻め込んで結局泥沼にはまる……。アメリカはベトナムの教訓を全く生かしていない。どこまで浅はかなのか。

もっともこれには構造的な理由がある。単にブッシュが単細胞なせいだけではない。米国と言えば典型的なプロテスタント(キリスト教:新教)の国、このプロテスタントと言うのが曲者なのだ。同じキリスト教でもカトリックや正教はもう少し思慮がある(程度の差だが)。

プロテスタントが宗教改革で成立したことは皆さんもご案内の通りだが、この宗教改革、教皇の権威を否定する余り勢い余って宗教であることすらやめてしまった。そして残ったのが「パウロ教」とでも呼ぶべき道德だ。

しかもこの道德、東洋思想の足元にはるかに及ばないほど知恵がない。実際パウロが行ったことは、伝道と称して前後の見境なくワンパターンに突撃することだけだった。しかもイエスの教えでなく自分の思い付きを。そして今の牧師たちはこのパウロ様を持ち上げるのに必死で、イエスの知恵のかけらもない。

つまりアメリカには、日本の武将なら誰でも持っていた戦略、つまり引き際を見極めてから初めて攻め入ると言う総合的配慮のモデルが完璧に欠落していて、ただ突撃するしか手本や見本がないのだ。

こうして一神教の国アメリカは世界に無能菌を撒き散らしつつ、今のうちはとりあえず技術力と資金力ででかい態度をしてはいるが、いずれ世界の厄介者扱いされるようになるだろう。その日は意外と近い。

2007. 08. 10    265    270

## 11、晴れる屋アフガン！

### 瞑想録（プレ3）

韓国教会牧師：私たちは何の勲もないのにイエス様の愛によって救われました。

信徒たち：ハレルヤ、アーメン！主に感謝ですだハムニダ。

牧師：皆さんはどんなお気持ちでしょう。救われていない人々が大勢います。

信徒たち：ハレルヤ、私たちを主の伝道に遣わしてください。

牧師：もちろんです。どこが良いでしょう。

信徒たち：もっとも困難なところに行って主の喜びを表現したいです。

牧師：主も喜ばれます。もっとも困難なところとは？

信徒A：アフガン。十字軍の潔い活躍を見ると、異教の地こそ伝道すべきです。

信徒B：アフガンは今危ないのでしょうか。渡航禁止も出ているし大丈夫かしら。

信徒A：困難だからこそ行くのです。十字軍プログラムを採択してください。

牧師：アフガン十字軍プログラム、これは良い。歴史的な伝道になるでしょう。新入り

信徒：でも、十字軍ってアラブから見れば単なる大きな迷惑だって。

牧師：主さえお喜びになれば異教徒の迷惑なんて恐れるに足りません。

信徒たち：そうだそうだ、私たちの命をアフガンボランティアに捧げます！

新入り信徒：伝道じゃなくてボランティアなのですか？

牧師：「伝道ボランティア」です。アフガンには困っている人たちが大勢います。彼らに奉仕することが即ち伝道です。

新入り信徒：と言うことは病院や学校を回るのですか？

牧師：そういうボランティアもあるでしょうが、私たちはアフガンの地で主をたたえる踊りをしたり寸劇をしたりします。

新入り信徒：それって単なるこちらの自己満足では・・・。

牧師：何を言っているのですか。主をたたえるエネルギーはどんな人をも感動させます。それほどにやれば良いのです。

新入り信徒：で、何年くらいアフガンで「奉仕」するのですか。

牧師：そうですね、10日くらいですか。

新入り信徒：10日？それじゃあ単なる学生のショートステイでは？

牧師：長いかわかりませんがありません。大切なことはどれだけ主の愛を伝えられるかです。うーん、素晴らしい企画だ。

信徒たち次々に：私たちも行かせてください。

牧師：それではチャーターするバスの都合もありますから、第1陣は20人程度とします。持ち物はナップサック程度。

新入り信徒：あの一、女性はスカーフとかしたほうが良いのでは。

牧師：イスラムのやり方にへつらう時点でもう負けています。そのような心構えでは失格です。女性の半そでも可とします。

新入り信徒：少しは相手の都合も考えた方が良くと思うのだけどなあ・・・。

で、一行はアフガニスタンに出かけて広場で主をたたえるダンスなどしたあとに、市場でお土産などを買った直後に拉致された。

タリバン: 動くと撃つぞ。

一行: ひええ、命ばかりはお助けを。

牧師: 主……じゃなかった韓国大使館に助けを求めてください。タリバン諸君、政治問題化するよ。

タリバン: うるさいな、これは「拉致ビジネス」だ。飛んで火に入る夏の虫。さあ、引き換えに仲間を解放してもらおうか。

## 12、リップヴァンウィンクルと浦島太郎

米国に「リップヴァンウィンクル」と言う昔話がある。怠け者で毎日遊び歩いていたリップはある日山の中で老人に酒を勧められ、飲んで目が覚めて町に下ると人も家並みもまるで変わっている。一体どういうことかと驚いていると実はリップは山の中で何十年も眠りこけていたのであって、もう大好きだった妻子とも会えない、というストーリーである。

「米国版浦島太郎」と紹介される。確かにこの2つの話は良く似ている。だが似ているからこそ違いも目立つのであって、私には違いの方が日米の思考過程・文化の違いを象徴していて興味深い。

リップの話には明白な教訓がある。つまり「だから一生懸命に働け」という明確なメッセージだ。根が怠け者の米国人にはぴったりの話だし、子供のころ母親からこの話を聞かされた子供は恐怖におびえ、子供心に「勤勉になろう」と誓うだろう。背後にはキリスト教的勤勉主義・禁欲主義の影もちらついている。

それに対し浦島の方は教訓がない。浦島が爺さんになったのは亀を助けたのが悪かったのだろうか。まさか。じゃあ乙姫様にうつつを抜かしていたことか。これは成り行きと言うものだ。では言いつけを守らずに玉手箱を開けたことか。これがそんなに、例えば覗き屋トムほどに悪いことか。いや違う。

浦島の話はもののあわれ、絢爛豪華、時のはかなさを語っているのだ。教訓話のような芸術の香りもない低俗な話ではなく、これははかなくもうつくしくものがなしいわびさびの幽玄の世界である。悟りの世界と言っても良い。こういう話しを子供のころから聞かされると、おのずと高貴な美観が醸成される。

ここに東洋のすごさ、日本の高さがある。浦島だけでない。竹取物語だって他の民話だって日本の民話・童話は教訓がないところがすごいのである。こういう国に生まれたことを感謝したい。

他方のすべてを教訓話にしてしまうキリスト教、これをもっと徹底すると共産主義の思想教育、一党独裁、世界同時革命、真実は党中央が作るという、かつてのソ連や今の中国がやっている人間性のない嘘だらけの社会になる。かつて米国が必死になって潰そうとした共産主義は、彼らの思想的バックボーンであるキリスト教を単に徹底しただけの、実は双子の兄弟なのだ。これらがまとめてなくなったときに、地球は真に住みよいところになるであろう。

### 13、一粒で2度おいしい？ 環境問題の不思議

私は某企業で環境問題にも関わっているが、この分野関連の技術開発をやるたびに正直言って疑問ばかりが増殖して空しくなってくる。どういうことか。環境問題といえバ今の社会問題の花形、学生さんたちの関心も高く、また大学や企業でも予算が取りやすく注目されやすい、ホットな分野なのに。

実はこの業界を眺めてみると、環境問題で高い技術力を持っている企業と言うのが往々にしてかつて環境を目一杯汚染して「製品」を大量生産して大もうけした会社なのだ。彼らは「汚し主」として汚染の何たるやを実は熟知しているので、環境浄化技術の開発もお手の物で、「待てました」のお家芸なのだ。今度は環境浄化で荒稼ぎして生き延びようと、虎視眈々と商機を狙っているし、経産省はもちろん環境省もこの後押しに必死だ。

でも素朴に考えて何かおかしいと思わないか。汚した奴が怒られるどころか焼け太りよろしくただでは起きんと今度は環境浄化でまた稼いじゃうのだよ。「一粒で2度おいしい」上に今度は優良企業として表彰までされちゃうのだよ。

欧米が世界標準の物質主義、資本主義の矛盾がこれほど明らかに見えている問題もないだろう、誰もことさらに見ようとはしないけれど。こうやって力を力でねじ伏せようとしている限り、自然や地球はダッチロールして破滅に向かうだけだ。「人が自然を支配する」などと言うキリスト教信仰をまず捨てよう。

環境問題の真の解決には、技術開発の前に、「自然と今度こそ共生する」心構えを情

勢すべきなのだ。そして今こそ東洋思想、アニミズム信仰の出番なのだ。

2008. 04. 12 252

#### 14、書評:ふつうの人の神道

首記の本を友人の勧めで読んだ。副題に「弥生神道から『火水伝文』まで」とある。1993年発行であるからもう15年前の本である。もっとも神道の悠久の歴史に比べればごく最近かもしれないが。

神道の全貌を簡便に解説した本は意外と少ないので、もしそうならば結構と思って読んだが、必ずしもそうでもなかった。少なくとも「ふつうの人の」は言いすぎである。この本は大きく前半と後半に分かれる。前半が「弥生神道」の部分、後半が「火水伝文」(ひみつのつたえふみ)及び「日月神示」(ひふみしんじ)の解説部分である。

このうち前半はお全うである。古事記が記述された奈良時代はじめ(712年)以前のより生の日本人信仰を、神の名前(やまとことばの再構築)や神社や聖地の位置関係から解明していこうと言うもので、態度的には本居宣長や最近の日本語学にも通じるところである。

他方後半の日月神示や火水伝文の部分、これらは古事記や日本書紀とは関係なく、むしろごく最近の昭和末期や平成初期にある一般人に日本古代の神が「臨んで」、ひらめきにより書かせたと言う一種の啓示である。これら啓示の全体の文体は古代日本のそれを踏襲しているものの、内容的には伝統的な神道を何歩か踏み出している。

そしてこの本では、これらの啓示は、フリーメーソン＝ユダヤ人による世界征服、日本乗っ取りに対する陰謀を警告しているものだと言う。この辺は人により異論があろう。啓示ならばもちろん神のご託宣なのだが、だから神道関係者は全員信じろと言うのは、同じように啓示で成立した神道系新興宗教の天理教や大本教を直ちに信じろと言うのと同じことだ。この本の人たちがこれら新興宗教と異なるのはただ一点、まだ徒党を組んでいないと言うことだけだ。だから本の題名の「ふつうの人の」は言いすぎであらう。

ただ、理由は異なるにしろ、我々大和魂を持つものとして、神道や日本民族に安泰として危機感がないのはまずいと警告している点は重く受け取らなければならない。



現実的にはユダヤ人は自分の存在を確保するのに精一杯で、今他国を侵食しているほどの余裕はないはずである。警戒すべきはむしろキリスト教による侵略である。実際となりの韓国は儒教国家であり古来の伝統も有しているのに、国民の3分の1がキリスト教に取られてしまっている。

ここはキ教宣教師の口先や親切にほだされるか、あるいは鳥居に拍手を打つとか般若心経を唱えるときの身の引き締まる緊張感を保ち続けることができるかと言う問題で、たしかに日本人一人ひとりにつきつけられていると言えよう。キ教が日本では左翼や学生運動崩れの隠れ蓑になっていて、献金の多くが実はそっちの方に流れている点にも留意されたい。

### 15、考古学や歴史学は「忘却ビジネス」か？

人文科学の一分野に歴史学とか考古学と言った分野がある。これらの分野の特徴は、その時代に生きた当事者たちなら当然に知っていたことを、人類が不完全で忘却を常としているために、仕方なくその不完全さを少しでも補うためにあるという性格である。いわば必要悪の「忘却ビジネス」という「悪徳商法」ではないかという面だ。

この意味は一面とは言いながら正鵠を得ていると思う。少なくともすべての自然科学やほとんどの人文科学にはこのような「落穂ひろい」あるいは「過去の継ぎ当て」の性格はない。とするならば考古学等は人間が不完全で二流であるがゆえに仕方なく存在する、本来不要の二流以下の分野であるということになる。

でも、以上の議論の当否は別として、多くの人にとって考古学や歴史学は夢の多いファンタジックな分野だ。で、これからの非西欧的ポスト功利主義の時代にあっては、ファンタジックだと言うだけで存在価値はあるのだが、だから考古学者が失業するということはないのだが、ゲームソフトと同等の位置づけでは悔しいことだろう。

そこで思うのだが、人類の最大の特性が忘却にあるとしても、それは必ずしも欠点ではないということだ。そもそも自分のこと一つとっても一瞬前についても覚えていないとはほんの一握りだ。20秒前に息を吸っていたか吐いていたか、誰も覚えていないだろう。ましてやそのときの鼻周辺の気流の流れ、さらにはそのうちの酸素の活性度など知る由も無い。宗教によっては天または神に「全知」というジェネラルアーカイブの特性を付与するものもあるが、この「全部」という概念自体にラッセルの逆理が存在している。更に全部知っていたとしても、その中から意味のあることを取り出すという思考過程が必要だ。

と言うわけで考古学は人の愚かさに付け入った乞食商売と言う見方はごく一面的である。仮に地球外に高等生物が居たとして、数学者が言うように同じ数学を宇宙人も建設していると言う異見にはかつて述べたように反対であるが、この非普遍的な世界観を以ってしても考古学や歴史学の存在理由は普遍的なのである。

## 16、武田信玄は部下思いだったか

甲斐から信州にかけて、「信玄の隠し湯」なる温泉が何十箇所も存在している。見つけにくいような山奥に効能の高い温泉が点在していて、良くもまあ見つけたものだと感心する。しかもこれら隠し湯は、自分が入るためでなく部下を入れるために開発したと言う。この話に「信玄堤」の話や「人は石垣、人は城」の名文句があいまって、「信玄は部下思い」という印象が一般に定着している。

だが果たしてそうであろうか。泣く子も黙る、織田信長や徳川家康さえも震え上がらせた名うての武将が一方でそこまでお人よしと言うのは、水戸黄門漫遊記の様な娯楽文学の世界では面白いことかもしれないが、本当にそれだけだったのだろうか。

私は逆に信玄は人使いの極めて荒い合理主義的な人間で、隠し湯もその一環であると考えている。つまり信玄は部下を厚遇するためではなく、むしろ逆に、傷ついた部下を早く癒して一日も早く前線に復帰させる、つまり部下の回転率を上げるために湯を開発したと見ている。実際敵が、大怪我をしたはずの武者が早くも戦いに臨んでいるのを見て驚いたと言う記録が残っている。

しかもこの隠し湯開発、そのためにやったのではなく、おそらく金山開発の一環として、そのいわば副産物として開発された可能性が高い。こう見ればなかなかしたたか者としての信玄像が鮮明に見えてこよう。そしてこう見たほうが彼のさまざまな行動を理解しやすく自然である。もちろんこの説に科学的証明は付けられないが、「自然であること」の重要性を見直して欲しい。

## 17、とある打ち上げ会

数年前会社でのこと、その当時の私の部署には親の代から全員クリスチャンと言うこちこちのクリスチャンが居た。なにか魂を抜かれていると言うか、人造人間というか、不気味に気持ち悪いオーラが漂っていた。部署のほかの連中もそう思って居ただろうが、そこは大人、露骨に口には出さない。

その年の暮れ、大きなプロジェクトが終わって打ち上げをしようということになった。そのとき、そのクリスチャン坊やが突然手を上げて「幹事を引き受ける」と言い出した。そしてなった。

でその打ち上げ会の当日、そのプロジェクトはとても大変なもので皆疲れていてしみじみと飲みたかったのだが、会場について驚いた。もみの木が飾った場違いな個室に連れて行かれ、その上みんな疲れているのもお構いなく、ビンゴとかいす取りゲームとか、とにかくその手の良く教会でやっている子供じみたゲームをみんなに強制したのだ。

みんな大人だったから口には出さなかったが、放課後の思いもよらない「労働」でへとへとになった。しかも並より高い宴会費の大半はそのしょうもない個室の借り代とゲームの景品に消えていた。そいつの強制が終わって少しは飲み始めてみるとそいつは「牧師様に禁止されているから私は一滴も飲みません」などと言い張る。

そいつはきっと牧師様の指示通りに動いただけだろう。部署の仲間から浮かないために宴会係は自ら立候補して身の安全は確保した上で、やり方は回りの思惑関係なく全部自分流、そしてその週の日曜日には教会で親や牧師様に報告して褒められたことだろう。

ことさらに悪人とは思わないけれど、こんな慇懃無礼な奴は後にも先にも見たことが無い。その後「同じ教会の女性と結婚します」と称して招待状が来たが、私は「人をコケやエキストラにするのもたいがいにしろ」とばかりに招待状をびりびり破って無視した。

## 18、この人を見よ！

私は信者ではないが、キリスト教の牧師や伝道師を何人か知っていた。そして知っていながらなぜ信者にならなかったかと言うと、彼らには必ず一定のパターンがあって、そのパターンが余りにもバター臭くて鼻について、一言で言うと不自然極まりなかったからだ。

そのパターンとは、異端と称されるモルモンやエホバでも同様ののだが、どんなに話を面白く作ろうと、分かりやすくしようと、オブラートに包もうと、皮1枚むけば結局は彼らの思想の押し付け、共産党も顔負けの思想教育に過ぎないからだ。

「イエス様はあなたの救い主です」「イエス様はあなたを愛しています」「イエス様はあなたを待っています」、いきなりこう言われても「その知らない人にぼくは何も頼んでないよ」と内なる素朴な感情は答えてしまう。思想教育であるうちは日本人を折伏するのはまず無理だと思う。現に信者数は国民の1%未満で且つ高齢化しているという現状がある。

日本に定着している仏教と比べてみよう。「山寺の和尚さん」と言う童謡はあるが、「山教会の牧師さん」などと言う歌はない。下手に作っても衣の下に鎧が見えるか、異端の烙印を押されるかどちらかだ。一休頓知話のキ教版も聞いたことがない。昔マンガで「ほら吹き和尚」と言うのがあったが、こういうお遊び的要素がキ教には全くないのだ。ただ思想教育一筋、つまらないことこの上ない。

ところがかつて1人だけ居た、おもしろい、つまりキ教としては剥目するほど革新的な伝道師が。イエス玉川さんだ。若い人はもう知らないかもしれないが、この人の「では神の御前で懺悔しましょう」という懺悔漫才はめちゃくちゃ面白くて一般にも受けた。確か賞ももらっている。キ教の決まり文句ではないが「この人を見よ！」と言いたいくらいだ。この人の路線を続ければもっとキ教も良い意味で大衆化して、日本文化に溶け込んだであろうに。

キ教の自称主流はこのチャンスをみすみす逃した。そして依然として頭が固いままだ。私は信者ではないし信者になる気もないからどっちでも良いのだが、まあ、あと数百年はだめだね。

## 19、金正日あなたは素晴らしい

最近というか、かなり前から気づいていたのだが、キリスト教の聖書の「神様」「主」をまとめて「金正日」に一括変換しても立派に意味が通じるのだ。

その簡単な例として「インマニエル」という賛美歌を例にとろう。ここで「インマニエル」とはイエス様の別称で、直訳すると「神は私たちと共に居る」となる。そして歌詞は、「インマニエル あなたは素晴らしい インマニエル」この短い文句をマントラのようにひたすら繰り返すのみだ。但し「マントラ効果」の力は感じないが。

歌詞を見て分かるように、なぜインマニエルが素晴らしいのか皆目見当がつかない。さてここで「インマニエル」をまとめて「キムジョンイル」に変換してみよう。結果は全く

問題ない。北の人々や総連の人々が日々真剣に唱えていることだ。

私はこの事実を、他人のブログでよく見かけるように、将軍様をからかうために載せたのではない。そうではなくて、外来の狩猟民族の一神教の知らない「人」を指して、「この人こそあなたの神様、救い主です。さあ、ありがたく受け取りましょう」などと言われても、それこそ北の将軍サマほど遠い存在で、その不自然さにただただ当惑するのみだと言っているのです。

## 20、学校はなぜつまらないか

大多数の人にとって学校はつまらない。小学生のうちはまだ友達との遊びが面白いかがあるのだが、高校生になって依然として学校が楽しいと言う人はごく奇数に限られる。特に授業と勉強がつまらない。内容がつまらない上に試験があり、強制で、先には受験があり、しかも難しい割に将来使わない内容であることが目に見えているのだ。

例えば数学、99%の人にとっては四則演算以外一生使わない。うちの近所に不動産屋が居て本当に四則演算しか知らない、それも電卓を打つだけなのだが、立派に商売して青色申告も自分でやっている。三角関数とかましてや微積分など使う人は数学の教師になった人くらいのものだ。

それから英語、これは本来使えなければならぬのだが、日本の英語教育はおよそかけ離れている。帰国子女が「これは本当に英語ですか、私にはまるで分からない」と言っていた。会社に灘校東大卒の人が居るが、ペーパーテストはさぞ出来ただろうに、話をさせると「アイアイアイ・ディスディスディス」とかどもっているだけだ。

他の教科も似たり寄ったりで、つまり学校の授業は人を差別するのが目的の架空の「科目」について無意味に訓練を受けるところになっている。どうせ差別するのなら、碁とか将棋とか数独とか、面白みのあるゲームの成績で差別した方がまだ喜ばれるのと思うのだが。

こう瞑想していて最近はたと悟りを得た。考えてみたら会社の仕事だって負けず劣らずつまらず下らないではないか。それは私の会社だけでなくどこでもそうだ。そして大多数の人間がサラリーマンになるのが現代だ。ということは、学校教育はつまらず下らないことをへこたれずに文句も言わずに延々とやり続ける立派なサラリーマンを養成している、「我慢訓練所」なのだ。そう悟ったらすっきりした。

でもこの機能って刑務所とどこか違うのだろうか。違わないよね。先生たちだって「彼らに最も近い職種をあげなさい」と言われたら答えは「刑務所の看守」だもんね。

## 21、至悟録

至悟録(しごろ)にて瑞子(ずいし)曰く:

賢者は全体を広く観ずる。これを「亘」と言う。  
また賢者は同時にその要なる点を見抜く。これを「肝」と言う。  
亘と肝は相反するも、実は同時に一である。これを「真」と言う。  
賢者にこれを行わせるのは気である。この気を称して「翔」と言う。

賢者は常に大胆である。これを称して「勇」と言う。  
また賢者は同時に常に細心である。これを称して「臆」と言う。  
勇と臆は相反するも、実は同時に一である。これを称して「深」と言う。  
賢者にこれを行わせるのは気である。この気も「翔」である。

賢者は無から有を生じさせる。混沌から秩序を見出す。行わせるのは「智」だ。  
賢者は有を無に帰する。去ったものに執着しない。行わせるのは「慧」である。  
智と慧は相反するも、実は同時に一である。これらを称して「智慧」と言う。  
賢者にこれを行わせるのは気である。この気も「翔」である。

賢者は相反するものを同時に行う。真理があるからである。「中庸」と言う。  
中庸とは妥協ではなく昇華である。昇華は悟りに至る道でもある。

愚者は無意味に微細に入り本質を見失う。これを「雑」と言う。  
愚者はまた一般論や机上の空論に終始する。これを「滑」と言う。  
賢者は雑に陥らない。「澄」と言う。滑に陥らない。これを「具」と言う。

人間嫌いは人の間に距離を置き過ぎる。これを称して「離」と言う。  
欲の深い人は人の範囲を不当に侵す。これを「掘」と言う。  
賢者は人との距離を臨機応変に取って過たない。これを「親」と言う。  
賢者は賢者を近づけ、愚者を遠ざける。



## 22、ソロモン王の智恵を超えた悟り

ソロモン王の前で2人の女が1人の赤子を巡って奪い合いをしていた。そこでソロモン王は女たちに言った、「それならばこの赤子を真二つにして分けるが良いか？」それでも女たちはいずれも譲ろうとしなかった。

困り果てたソロモン王は「なんだよ、シナリオと違うじゃないか」などとつぶやきながら、赤子を裂いて女たちに渡した。これを横から見ていたシバの女王もこれにはさすがに驚いて目を丸くした。

そこにイエスがやってくると、カエサルの肖像が彫られたコインをトスし、落ちてきたコインを片手で掴むと、握ったままソロモン王に突き出した。これを見たソロモン王は、「ああ、お前がもう少し早く来てくれたら赤子を裂かずに済んだのに」と肩を落とした。

イエスは続けて言った、「狭き門より入れ、いやむしろ門のない関所より入れ。智恵の者が無門関を通るのは、ラクダが針の穴を通るのより難しい。」

## 23、いのち

禪の高僧が弟子たちに「いのちとは何であるか」と問うた。

一番弟子が答えた「利他の心です。善人の救われる、ましてや悪人を、と言われるとおりです。」

その答えの機転のなさに、高僧は首を横に振った。

次に典座（てんぞ：料理係）が呼ばれた。

彼は風呂敷を取り出し、くしゃくしゃに丸めると「これが死です」、

続いてそれを広げて「これがいのちです」と答えた。

高僧は「良い」と言った。

さて、天なる神がイエスを呼んで問うた、「いのちとは何であるか。」

イエスは地上に降りると十字架に架かり、3日目によみがえって神のもとに帰ってきた。

天なる神は「良い」と言った。

その神にパウロの活躍ぶりが目に入った。

天なる神はパウロに「いのちとは何であるか」と問うた。

パウロは「愛です。いのちの償いです。身代わりの死です」と答えた。

その答えの余りの凡庸さに天なる神は声も出なかったが、場の空気をまるで読めない(KY)頓珍漢なパウロは、自分の答えの素晴らしさに神様も驚嘆しているのだと思い込み、第三の天から戻ると直ちにあちこちに自説を吹聴して回った。で、今のキリスト教がある。

## 24、救いのしらせ

東洋系多神教は悟りを求めるのに対して一神教は救いを第一とする。果たして救いであろうか、悟りであろうか。私はかつて、ちょっと親しかった宣教師に「大切なのは悟りではなく救いです」と断言されたことがある。そしてまさにこのことが、私をしてキ教が自分と相容れないことを悟った瞬間でもあった。

キ教の「救い」は、やはり一神教では得意な、目先につじつまあわせ、屁理屈こきの典型でもある。たとえ今はつらくても、あるいは損をしても、必ず救われ報われますと言うが、その根拠は単に「信じたから」であって、それ以上の何もなく、一方信じないものは救われない。狭くて薄っぺらな「救い」である。

日本の伝統芸能にはたくさんの魂を揺さぶる名作があるが、そのほとんどが不条理に根ざしている。例えば能の「安達ヶ原」、ここに出てくる鬼女は人を食う悪女だが、そうなったのはそれ以前の救われない不幸の故であった。そして最後まで救われない。また浄瑠璃の「曾根崎心中」、これも救われない男女が最後は心中する物語だ。幕末の新撰組、これも客観的には無謀な試みだったとはいえ、滅びの美学である。ここにはもののあわれ、わびさび、滅びといった、深くて幽玄な世界がきらめいている。

そして人々はこの救いの無さゆえに、話に魂をゆすぶられ、涙して感動するのだ。インスタントな安っぽい救いの世界ではせいぜいイソップ程度の教訓話しかできない。味気の無いつまらない世界だ。こんな世界に住むくらいなら、私は人生を辞めるよ。

そして更に畳み込んで言うが、悟りの結果生まれるもの、それは実に慈悲と救いなのだ。世の中を我執なく深く見通して唯我独尊になったとき、世を貫くものが実は大いなる慈悲であって、それは歓喜であり、そしてすべての人々や自然は全部結ばれていると言う救いなのであることを真に知る。秋葉原の加藤君もこういう訓練を受けていたら、もっと違った人生観を持てたであろう。一方で薄っぺらな救いの先に悟りなどあろうはずもない。

口先だけの安っぽい「救い」と広大無辺な悟りによる救い、皆さんはどちらを選ぶであ

ろうか。私は迷い無く後者である。

## 25、シェイク・ナッスルディーン

貧乏な若者シェイク・ナッスルディーンはある日、あての無い旅に出た。途中で腹が減ったので、フライドチキンを買って食べた。そして残った骨を、たまたま彼の名前が書かれた紙袋に包むと、道端に捨てた。

数日してその道を通った人が、道端のごみを見て土をかけて埋めておいた。そして更に数ヵ月後、その道を通った人が道の脇に土の小山があるのを見て、「これは何かの塚に違いない」と直感して中を掘ってみた。すると骨が出てきた。

その人は一緒に歩いていた友人に、「そういえば昔、この辺に祖国のために戦って死んだ人が居るという話を聞いたことがある。これはその人の骨だろう。」と言った。その友人も同調して「そんな立派な人にこの程度の塚では申し訳ない」と言って、私財をなげうって祠（ほくら）とし、「民族の恩人シェイク・ナッスルディーン様ここに眠る」と銘を入れた。

それから何年かしてこの噂が王様の耳に入った。王様は部下に命じてその地にモスクを建てさせた。そしてそのモスクを「シェイク・ナッスルディーン廟」と名づけ、骨を安置し、似顔絵を高々と掲げ、莫大な寄進をした。そのモスクは王様が定期的に礼拝する、別格モスクになった。

そのころ放浪から帰ってきたナッスルディーンは、その廟を見ると、たまげて腰を抜かした。自分を讃える廟が建てられていたからである。ナッスルディーンはモスクの中に入ろうとした。すると門番に止められた。そこでナッスルディーンは、「私こそがそのシェイク・ナッスルディーンなのだ」と言った。すると門番は「こともあろうにナッスルディーン様の名を語るとはなんと言う罰当たりだ」と怒鳴ると、ナッスルディーンをしこたま鞭で打ち据えた。

「さあ、ナッスルディーン様にわびるのだ」、そう門番に言われてシェイク・ナッスルディーンは、自分がかつて捨てた骨と、変にいかめしく飾られた自分の肖像画に頭をこすり付けて何度も礼拝すると、言葉も無く立ち去った。

## 26、凛々しいジャイアン

今日の話題は国民的コミックスの「ドラえもん」から「凜々しいジャイアン」です。かなり笑えますね。ジャイアンであることが分かりつつ、顔つきがかなり凜々しく、IQ180とか正義の味方とかになっている。日本のアニメカ、イラストパワーの結晶です。相当の力量がないとこういうものは作れません。

本来のジャイアンは下の画像のような、腕っ節が強くガキ大将だけど頭は弱くて且つ破廉恥なのです。ちょっとした筆の入れ具合でこうもイメージが変わるので、アニメーターは面白くて辞められない人が多いのもうなずけます。

かく言う私も、絵の方はまるでダメなので、仕方なく科学技術で飯を食っていますが、科学技術は良い意味でうそをつけない、本当の事しか書けないので、ファンタジーや想像力の入る余地がなくて本当につまらないです。人の存在価値は想像力にあり。

と言うわけで絵は下手ですが、このジャイアンのような乗りでアニメーターに描いて欲しいテーマをいくつか挙げてみます：

- ・ホームレスになった課長島耕作。
- ・「押してごめんね」「いいよ」などと言いつつ幼稚園生の小沢と福田。
- ・実は丑の刻参りをしているヒラリー・クリントン。
- ・「いよ～、ネーチャン、一緒に飲まねーかい」などとラリって居るヨン様。
- ・仏様になって後光が差しているボブ・サップ。
- ・反則技ばかり繰り出すダークなウルトラマン。

## 27、パウロのパン種

使徒ペテロが血相を変えてイエスの元にやってきた。「イエス様、パウロが『イエス様は異邦人のためにも十字架に懸かれた』と言っているのですが、本当でしょうか？」

イエスはすぐには答えなかった。近所にパリサイ人や類似の教条的信者が居ないのか確かめたのである。もし「その通りだ」と答えれば「あなたの信仰に入ることに意味が無い」と言われそうだし、「そんなことは無い」と答えれば「あなたの教えの広さはその程度か」と言われそうだったからである。

漁師上がりの純朴なペテロには分からなかったが、このときパウロは明らかに虎の尾を踏んでいた。それがとっさに知恵者のイエスには分かったが、パウロの真意が善意なのか悪意なのかは不明であった。パウロが自説を天狗になって吹聴していることを知ってはいたが、心配が現実化したのだ。

イエスはペテロら12弟子に、「よくよくあなた方に言う、私は決して人々の罪を背負って贖罪の羊として十字架に懸かったのではない。そんなことは福音書を虚心坦懐に読めば子供でも分かることだし、いずれニーチェが著書『キリスト教は邪教です』で明らかにしてくれる。」と言った。

そして12弟子を近くに呼び寄せると彼らの耳元にこうささやいた、「パウロのパン種に気をつけよ。」だが歴史の皮肉か、イエスは結局抹殺され、12弟子は散らされ、パウロ教だけが残った。パウロのパン種がパンパンに膨れかえってすべてを圧殺し、歴史すら塗り替えた。

## 28、ダマスコの「回心」

パウロがダマスコの砂漠を歩いていると突然まばゆい光がきらめいた。パウロはたじろいだ。すると天より声が聞こえた、

「パウロ、パウロ、どうして私を祭り上げて棚上げし、人々から遠ざけるのか。」

「誰だか知らねえけどさも偉そうに。お前こそ一体どこの馬の骨だ。」

「私はお前が『私の主です』などと称して商売のネタにしているイエスである。」

パウロは思わずマツツアオになった。本物のイエス様が目の前に現れようとは夢にも思ってもいなかったからである。

「くそしゃらくせい、野郎ども、このクソ爺をたたき切れ！」と言いたいが、

「いいえイエス様、私はちょっとその『あがないの神学』というやつを、イエス様の代わりにちょっとばかし広めさせて頂いているだけでございます。」

「これパウロ、嘘をつくではない。お前はいつも『私に見習え』などと言っているではないか。少し懲らしめられたいか。」

「ヒエー、お代官様、お目こぼしを。2度といたしません。神様に誓いますだ。」

「直ちにタモリの所に行ってすべてを告白し悔い改めるのだ。」

「へいへい、そうしますのでどうか命だけは取らないで下さいまし、ヒーヒー。」

だがパウロは結局悔い改めず、心の中で赤い舌を出しながら、引き続き自説を吹聴して回った。で、今のキリスト教会は、そのペテンの直系である。

## 29、相関検定の意味

実験データの整理の仕方の一つに「相関図」がある。2つ以上の項目の数値座標のばらつき方で、その該当する項目同志に意味のある関係があるかないかを判定する技法である。では例に挙げた上の図で、あるクラス（仮想）の数学の成績と国語の成績は相関があるというべきか、あるいは無いというべきか。

なんとなく傾向は見えるが、直線にほぼ乗るというほどではない。このケースの相関係数を算定したところ、0.5 程度であった。相関係数は0なら完全に無関係、1なら全く直線上に乗るという数字である。一般に統計学の現場では、少なくとも相関係数が0.7 以上、願わくは0.8 以上ないと、相関があるとは言わない。

ところが世の中には「検定」という数学的技法がある。そしてここに出ている20個ほどの点で相関係数 0.5 を検定すると、「99%以上で有意」、つまり相関ありという結果になってしまう。これはどういう意味かという、20個の点を豆まきよろしく適当にばら撒いたときに、この程度のまとまりをなす確率は 1%以下で、ほとんどありえませんよ。ということである。

ここに検定の「落とし穴」がある。つまり、「全く無作為と仮定すると偽である」と言っていて、欧米系哲学（数学もこの一分野）では「偽でなければ真」の二値論理が基本だから、この結果は「相関がある」とされて現場の常識と乖離するのだが、多値論理の立場に立ってみればこのケースは単に、「相関があると言うほどでも、無いと言うほどでもない」と言うことを主張しているのである。

話が長くなったが、私が言いたかったのは、欧米系の哲学では二値論理以外は邪道とされているところ、実は相関検定において、気づいては居ないものの彼らだって多値論理を認めているということだ。多値論理は東洋哲学では普通にあるので、日本人には違和感はない。私は、この辺から西欧哲学が破綻しないかと、ひそかに期待している。

2008. 07. 13 237

### 30、もののあわれ

敷島の 大和心を 人問えば 朝日ににおう 山桜花（宣長）

本居宣長は江戸時代中期の日本を代表する国学者です。やまと心、やまとだましいの本質をひたすら突き詰めていって、たどり着いたのは「もののあわれ」でした。彼は



この純化の過程で、儒教や仏教に代表される、もう日本に根付いて1000年以上も経つ、いわば土着した外来の教えすらも否定して、ひたすらやまとのこころのみを求め続けました。基督教など言うに及ばず論外の外の外です。

その彼が推薦している日本の古典文学が、古事記であり、万葉集であり、源氏物語です。しかしこれらの著作すら、彼は手放しで受け入れたわけではありません。これらの著作はいずれも、いにしえのやまとのこころの代表作なのですが、それでも「唐風が感じられる」で、これらの古典を読む際にも、先ず自らの心をよく禊いで（みそいで）、敷島のやまとの四季の移り変わりに心を空しく素直にしてから臨むべきである、としています。それほどに純粋なのです。

こうして苦節30年、彼の代表作「古事記伝」は出来上がりました。それはそれまで日本書紀に比べて低く見られていた古事記の真の価値を知らしめるきっかけとなり、その心は明治維新から終戦前の昭和に至るまで、脈々と繋がってきました。私は今、宣長さんを見習って、同じく心を雪いで、聖書からパウロたちのバイ菌を除去して、イエスさんのみを純粋に取り出そうと言う、「原初のイエス」活動を宗教でなく文化として実践しています。

もののあわれとは、美しいものを素直に喜び、悲しいことに素直に悲しみ、そこに人為的な教訓とか規範とか理屈などを混ぜない心がけです。おのずと身が引き締まる、言葉では言い表しがたい素朴で素直な感情の発露であります。咲いてはすぐ散る桜そのものであります。

私たち日本人には生まれつきこの「もののあわれ」のDNAが刷り込まれています。ただ単に余計な外来の人工的な屁理屈にたぶらかされなければ良いのです。さあ、心を裸にして、やまとびと本来の心のふるさとにみんなで帰ろうではありませんか。はっきりいいますが、もののあわれを忘れた者、異教に走る者は、大和の土を踏んで欲しくありません。

### 31、日本計算工学会の自己矛盾

日本計算工学会と言う学会がある。15年位前に出来た学会で、会員は千人くらいか。名前の通り、計算機を使って現象を計算しシミュレーションすることにより、工学的問題を解決していこうと言う趣旨の学会である。私も創立時に、縁があって手弁当でお手伝いをした。今はもう会員でもなんでもないが。

設立の趣旨にいわく、「工学に計算手法は今や、理論、実験と肩を並べる立派な第三の解析法である。この事実を踏まえ、計算機応用技法の更なる発展を期すために」、この学会を設立するという。だがこのもっともらしい文句、ちょっと変ではないか。

逆に問うけれど「日本理論工学会」とか「日本実験工学会」などと言う学会があるか？理論や実験はそれぞれの工学、機械工学とか電気工学とか、もっと細かく破壊工学とかそれぞれの分野で盛んにやられていて、も早全体を一つにまとめるのが不可能なほどに膨大だ。もちろんそれぞれの工学間で共通の実験技術もあるが、その情報はローカルにやり取りされていて、何の問題もない。

この観点に立てば、「計算工学会」などと全工学をまとめられるだけ、計算工学コミュニティはまだまだ弱小なのだ。その弱小であることを図らずも「日本計算工学会」の存在そのものが実証しているのである。これは皮肉な現象だ。計算工学が一人前と認められる瞬間、それはこの日本計算工学会が発展的に解消する時点に他ならない。

### 32、予知体験

私がまだ新入社員だったころ、余り親切でない売れ残りのお局（つぼね）的的女子社員が居た。私は正直言ってその人が苦手だった。ところがある日、その女子社員がお客様にお茶を運んでいてこぼすのを「見た。」つまりこぼす前に見えたのだ。そしてその5秒後くらいだったか、その女子社員が持つお盆が自発的に奇妙に揺れ出し、お茶が茶碗ごとひっくり返りそうになった。

私は条件反射的に出て行って、茶碗を受け取るとハンケチで女子社員の手を拭ってやった。その女子社員はその時点では何が起こったのかわからず茫然としていたが、数秒後、狐につままれていたのが解けたかのように「ありがとう」とぽつんと言った。周りから拍手が沸き起こった。課長もニコニコしていた。お茶はかなり熱く、まともにかかったらやけどしていただろう。

私にはなぜかこのような体験が数多くある。ある日、日差しの良い外を窓越しに見ていたら、なぜかサハスララチャクラ（ヨガの壺）が起動して、思わず瞑想にふけたこともある。

また、車を運転していて間違えて工事現場に入ってしまう、明らかに変質者と思われる人間が釘の刺さった棒切れを振り回してこちらに向かってきたが、なぜか私の一歩

前で金縛りのごとく立ち止まったことがある。私はもちろん無傷で助かった。

車と言えば夜中に見知らぬ土地で道に迷って明かりの全く無い隘路に入っしまい、Uターンしてかろうじて逃げてきたが、後で聞くとその隘路は行き止まりに絶壁で、とても落ちずにUターンできるような幅はないと地元の人に不思議がられたこともある。

またあるときやはり車で、木陰の道端でちょっと一旦停止したところ「早く逃げろ」と言う声がしたので早々に立ち去ったところ、少し前にその木で首吊り自殺をした人が居たことが分かったと言うこともあった。

バスケットボールの授業で、私めがけて飛んできたきつい玉を、自分でも気づかぬうちに体が勝手に動いて、見事に跳ね返したこともある。その時は運動音痴の私が周りのみんなに驚かれた。

私はこのような体験を、それこそ書ききれないほど数多くしている。そのほぼすべての場合で、私は何らかの意味で助けられている。そしてそのタイミングは今自分が思っている以上にクリティカルな、命にかかわるほどのタイミングであったように思える。

こういうことをつらつら考えると、自分は何者か、あるいは天によって「生かされている」と思わざるを得ないのだ。そしてなぜ生かされているかと言えば、私自身にはなんらの価値も無いから、きっと何か重要なきっかけとか使命があって、まだその使命をやり終えていないのだろと思うている。デジタルに科学的には割り切れなくても、アナログ的にそう感じ取れるのだ。

### 33、ガウス分布の自己相似

ガウス分布、確率論や金融工学、電磁気学をはじめあらゆる工学に顔を出す、この均整の取れた分布、解析的にも多様な取り扱いが出来るために、特に理論面で非常に重宝されています。

ところでこの分布、実は「自己相似」とでも呼ぶべき性質を有していることは余り知られていません。どういう性質かと言うと、図のように、ガウス分布を確率密度関数とみなして、そのガウス関数の各点に、密度に応じた高さで、ガウス分布を貼り付けていて、これらを畳み込み積分すると、再度ガウス分布が出来上がるという性格です。

自分はまだ証明していませんが、かような性格を持つ分布はおそらくガウス分布に限

られるでしょう。それほどに均整の取れた分布だと言うわけです。もっとも特に金融工学に応用してみると実感するのですが、分布に均整が取れすぎていて現実離れもはなはだしく、実用の向きには限界があるという一面もあります。

### 34、虚業の時代がやってきた

今まではゲームとかサブカルチャーとかは卑しいものとして軽蔑されてきた。これらに興ずる人々は何も生産せずに遊んでばかりいる石（米）つぶしとしか思われていなかった。

大人になってまでゲーマーとか貧乏劇団員とかやっている者は万年貧乏で、人生を棒に振った、お国の寄生虫くらいにしか思われて居なかった。結婚すらままならず、貧乏も因果応報と言うわけだ。

それに反して立派な大人になるということは実業を学び手に職をつけることを言った。典型的なのが工学部。つぶしが利いて、就職先については先ず事欠かない、物や財を生産して人々に供給し、国も富ませる立派な人々と言う無言の評価があった。そのための勉強が面白い、仕事にやりがいがあるかは全く別として。

このようについ最近まで「実業は善、虚業は悪」という図式が成り立っていた。でもこの図式は国や世界が貧乏なときの話であって、今のように世の中が成熟してくると話は変わってくる。むしろ一見無駄な芸術系の才能がもてはやされて、実業は戦後の百姓の様に、必要だけれどもさほど高くない、むしろ芸術系の才能がない人が仕方なく就く職業と、位置づけが交替しつつある。

一言で言えば奴隸文化から貴族文化へのパラダイムシフトである。実業の典型の物作りなど、ローマ時代や平安時代には奴隸や賤民のやる仕事であって、貴族は花鳥風月を愛でていた。一億総奴隸の時代から一億総貴族の時代へと時代が移り変わる、これは人類史において、産業革命以上の大変化である。

かくして、芸術（絵画・陶芸・彫刻、映画）、勝負事（碁・将棋）、運動（陸上、水中、氷上）、文学（純文学、大衆文学）、学芸（一芸入試の対象）、遊び（サブカルチャー、コミックス）と言ったものがもてはやされ、尊敬され、しかも結構なことに無形ではあるが財も生み出すのだ。これらの分野で秀でた者が今後は脚光を浴びることになる。

例えば勉強もスポーツも得意な人は、従来はスポーツを捨てて勉強を選んだが今後

は、勉強はそこそこでスポーツを選ぶようになる。またこれと言った才能のない人は仕方ないからしこし勉強をして手に職をつける。「君たち、才能を磨かないと工学部しか行くところがなくて、一生田舎で冷や飯食いだよ」今の高校では既にこのような指導が始まっているし生徒もその気で居る。やっと人間らしい時代がやってきたようだ。手放しで歓迎！

### 35、ナンシー関再び

あのナンシー関さんが亡くなってもう6年が経つ。そして彼女の7回忌を記念して、「ナンシー関 大ハンコ展 見た！彫った！書いた！ 39年の人生と全仕事」と称する展示会が日本各地を回っている。東京と名古屋と仙台はもう終わり、今は札幌、そして年末には故郷の青森で公開されるという。

私は渋谷パルコでのこの展示会に行き損ねた。そもそも情報も掴んでいなかった。かといって今札幌まで飛んでついでにラーメンも食べてくるような余裕もない。主催者にはもっと宣伝して欲しかったね。

彼女のことを語るのにどこから始めたら良いのだろう。「消しゴム版画家」という奇妙な肩書きからだろうか。不肖私も「昼飯写真家」というおよそ意味のない肩書きを持っているが、彼女の彫ったハンコは約5000個、半端じゃないね。そして他ならぬ彼女が一度名乗ってしまったからには、もう名乗れる人は居ないだろう。

そして彼女の容赦なく鋭い芸能批判、これもまた当時を語るのに欠かせないものだ。そして第一に彼女の容姿、一度見たら忘れない、ちょっと真似できない、ちょっと心臓に負担がかかりそうではあるが憎めない、あのスタイル(ちなみに死因は虚血性心不全)。

実は私は彼女の生前中は彼女のことを大して気にしていなかった。ところが6年前の急逝、亡くなったと聞いて私の心にぽっかりと開いた大きくて深くて暗い穴、そうか、彼女の存在はそれほど大きかったのかと自分でも驚いた次第である。他にこれほどの人物はいない。

ただ惜しむらくは芸能界と言う浮き沈みの激しい、テンポの速い世界においては6年前がもう一昔になってしまっていること。彼女の言動や作品は同時に見聞きしないと本当の迫力は伝わってこない。彼女が今も存命だったらどんな言葉や作品が飛び出すやらと思うと口惜しいばかりである。



### 36、そして靴だけが残った

リーガルと言う世界的に有名な靴メーカーがある。日本でも有名だ。有名といっても馬鹿高いブランド品と言うことではなくて、厳密な生産工程と精密な設計、それに丈夫な材料を使った、決して壊れない実用品といった趣の靴だ。いわく「厳選した素材を用い、50以上の工程を経て製造し、専門の職人が縫い上げて」出来た靴である。しかも靴底など消耗品は何度でも取替え可能だ。

1足3万から5万円くらいだが、10年以上はけると思えば長期的には安いものだろう。そう思って私も買ってみた。たしかに丈夫だ。丈夫な皮と寸法通りの組み上げ、それにピシッと決まった縫込み、どれをとってもマスターピースとしか言いようがない。

1週間も履いただろうか。あることに気づいた。足が悲鳴を上げているのだ。つまり足の形には誰にでも個人差はある。だからどんな職人でもここまでは面倒は見られない。そして普通の名もない靴だと1週間も履いていると靴の方が足になじんでくるものだが、リーガルの場合これが絶対にない。つまり足の方が骨も含めて変形することにより、靴に合わせるしかないのだ。

なんだか纏足でもされたような、足の拷問のような気分になってきた。ついに足が熱を出してきてどっと蒸れる。あたかも水虫が再発しそうな気配だ。もう居られなくなって道路に座り込んで靴を脱ごうとした。脱げない。こちこちの靴は変形を許さないの、素直に脱げてくれないのだ。もう靴を切り裂かないと足がやられそうになった。そして焼き芋のように湯気の立った足をやっと救い出した。

これだけ頑丈な靴ならたしかに何十年だって壊れないだろう。仮に私が車に轢かれてぼろぼろになったとしても、リーガルシューズだけは無傷で残るだろう。でもちょっとおかしくないか、この設計思想。靴のために足や人間様があるのかよ。結局私がリーガルを履いたのは1週間、1日1万円の高い買い物であった。

### 37、わき目をふろう

高1になる娘の英語の教科書を見たら、キュリー夫人を賞賛する記事が載っていた。もう昔の私が子供のころすでに、面接で「尊敬する人は」と聞かれたら、リンカーンかガンジーかキュリー夫人を挙げておけばよかったのだから、もうかなり古くから続いている「偉人」と言うわけだ。



そしてキュリー夫人のどこを褒めちぎってあるかと言うとこれまた十年一日のごとく、「わき目もふらずただひたすら科学の解明に努めた」ところである。単に英語を習得するための媒体と割り切ればどうでもいいのだが、教科書に載るからには内容的にも模範にしてほしいと言う編集者の意図があるのだろう。私はこの相も変らぬ古いパターンに辟易とした。

第1に「わき目もふらない」、これは果たして美德であろうか。ふと気分転換に周りを見回したり、仕事と並行して趣味を持ったり、ましてや瞑想と称してただ座しているのは無駄で悪なのであろうか。だとしたらその人の神は人を奴隷や手足としか見ていず、実は愛のかけらもない「神」だ。典型的がパウロ教（いわゆるキリスト教）だが、そんなに必死で働いて、その先にどんな良い事があると言うのか全く理解できない。

第2に科学技術、これを下にも置かない発想のなんと古いことよ。科学技術は決して聖なるものではない。単に「誰がいつやっても同じ結果が出る」と言うことを保障する一連の手続きに過ぎないのだ。この手続きを人より何回か多くやったところで所詮は回数の問題、なんらのひらめきも気づきもそこにはない。単に「当たり前」があるだけだ。

私は言いたい、「少年よ、みんなよ、老いも若きも、男も女も、みんなわき目を振ろう」と。そしてわき目をふったときにこそ心の平安と、豊かさと、そして全く切り口の異なった新たな発見があるのだ。現代人に欠けていて訓練すら受けていないこと、それは「わき目をふること」なのである。「わき目をふらない」の一枚岩は今の賭場経済ほど危うい。

### 38、天才か気違いか

私の学生時代、ちょっと変わった先輩が居た。仮に中川さんとしておこう。この中川さんの口癖は「私こそ学長にならねばならない、それも今だ」だった。大学の当時のありようを嘆き、しかも彼には革新的な改革案があると言う。

その改革案についてある日尋ねてみた。中川先輩は自分の卒論の審査風景を引き合いに出して語ってくれた。彼の卒論のテーマは「工場における労災低減への提言」であった。それに対し中川さんはただ一行「ヘルメットをかぶれ」と書いて提出したそうだった。

すると教授から、「これでは単なる作文だ。データを取ってきて、数値を根拠にして語りなさい」と指導を受けたそう。中川先輩いわく、「あきれてものもいえなかったぜ、全く。数値の根拠がないと理解できないなんて愚の骨頂だ。ヘルメットの重要性は現場を一目見れば明らかじゃないか。これだから日本の学界は腐っている。」中川先輩はこの年卒業できなかった。

中川先輩は「私が行動を起こそうとするといつも双子の弟が邪魔をする」とも言っていた。ところが周りに聞いてみると、その双子の弟を見たことのある人は誰も居なかった。

やがて私も大学を卒業して、中川先輩のことも忘却のかなたに行ってしまったが、最近ふと思い出して、「あの人は実は天才で、我々凡人の理解を超えたところに居たのではないか」とも思うようになった。でも、念のために検索サイトで彼の名前を調べてみたが、1件もヒットしなかった。良くも悪くも世には出ていないらしい。彼は今頃どこで何をやっているのだろうか。

### 39、世の中は必然か偶然か

世の中は必然が支配しているのか、それとも偶然が支配しているのか。これは古今東西の哲学の永遠のテーマである。

仮にすべて必然だとすると、私が今この記事を書いているのも、あなたがこの記事を読んでいるのも、さらに加藤君が秋葉原でナイフを振るったのも、全部地球が生まれる前から仕込まれたことであって、我々は単にその役割をこなしているに過ぎないことになる。必然的に正義も悪も、成功も失敗もないことになる。これは常識とちょっと違うのではないか。

では仮にすべてが偶然だとすると、私が今この記事を書いているのも、あなたがこの記事を読んでいるのも、さらに加藤君が秋葉原でナイフを振るったのも、全部たまたまそうなかっただけであって当事者には何の責任もない。更には文明の発達や人類の発生も全部たまたまそうなかっただけで、ここにも正義も悪も、成功も失敗もないことになる。これもまた常識とちょっと違うのではないか。

ちょっと視点を変えて物理学、特に力学を見てみよう。古典力学は完全に決定論、すべてが必然だ。他方量子力学では確率論こそ実相、すべてが偶然と言うことになる。物理学にも両極端しかないのだ。哲学でも物理学でも、極端こそ実相なのだろうか。

むしろ「その上にあるもっと本質的な真理がまだ見出されていない不完全な状態にある」とこそ、思えないだろうか。

さらに神学を見てみよう。特に一神教では神は完全だから決定論的色彩が強い。しかし完全に決定論だと人の勤勉や努力や善意は全く無意味になる。つまり、「どうせ全能の神の御心のとおりにしかならないさ」というわけだ。焼け鉢なつまらない世の中である。翻って偶然の要因が入るとすると、「神様もさいころを振る、昼寝もする」と言うことになってしまう。

以上見てきたように、必然論も偶然論もどこか常識に比べて極端だ。この極端のジレンマに陥ったときには、「常識を疑う」のが従来の西洋哲学、キリスト教論理の立場であった。そしてこの「常識こそウソ」という倫理は世界標準ともなっているが、素朴に、果たしてそうであろうか。むしろ常識と言う人類固有の感覚を放棄した「人類」など単にロボットに過ぎないのではないか。

さてここで東洋の智慧を生かして、西洋的絶対論理の世界から蓋然論理の世界に入ってみよう。蓋然論理の世界でも論理の連鎖はあるが、あくまでも蓋然的だ。だから主要な流れは必然であるものの、個々の事象は偶然と言うことになる。例えば明日あなたが寝坊するのは偶然だが、だからと言って会社は決してなくなりはない。ローマ帝国はシーザーという天才によってなされたが、遅かれ早かれシーザーのような天才が出て、大なり小なりのローマ帝国を作っていたのだ。

こういう偶然と必然の調和的發展こそ、我々が普段自然や人事や歴史や宗教や世の中の流れすべてに素朴に且つ自然に感じていることではないか。つまり人の素朴な感情を認めさえすれば、蓋然論理によって、哲学もそして物理学も上滑りな架空の理論から現実に戻されるのだ。人の才能と努力に乾杯。そして天の不易流行な運行に乾杯。蓋然論理はこの双方を保障します。

#### 40、ニート革命

ニート、決して褒め言葉ではない。むしろ陰気で後ろ向きで犯罪予備軍のようなイメージを彼らに対して持っている人がほとんどだろう。でもこのニートたちこそが今の閉塞したワンパターンのつまらない世界を変えて、光り輝く、多様性に満ちた、人間の本性を取り戻した、人類総貴族の社会を作り上げることが出来ると言ったら、皆さんは驚くだろうか。

今の世の中はキリスト教が作り上げた一神教的なドライな社会が世界標準になっている。なんでもデジタルで、すべては数値化され、効率だけが重要視されている。他方で数値化を拒む「人間性」とか「余裕」とか「楽しみ」とかは無視されるか悪のレッテルを貼られている。人は個々ばらばらで自分の得のみ、連帯とかは失われ、モラルとかマナーとか美德とかは「正直者が馬鹿を見る」を絵に描いたようなものでしかなくなっている。

そもそもキリスト教では人間たちは皆、神の国建設という「高邁な」目標のための奴隷に過ぎないのだから、ボロ雑巾のように使い捨てられるのが当然も当然、当然を通り越して、むしろ自虐的に「ありがたくももったいない」と言うわけだ。人類はロボット同然の惨めさだ。人の心の細やかさなど一皮剥けば屁のカッパ以下になっている。すべてはイエスかノーかのどちらかしかない。

この極端に肥大化したデジタル「勤勉」社会に、人々は本当のところはなじめないのだが、ほとんどの人が自分をごまかし、考えるのをやめ、ちょっとした出世と言う目先のご褒美につられて、無味乾燥な人生を送っている。でも中にはもっとナイーブで、自分に正直な人たちが居るのだ。

こういう人たちが、もちろんニーと全体から見れば一部であろうが、ニート軍団の一部をなしている事実注目して欲しい。ナイーブ過ぎて現代の規制社会に適合できないのだ。でも本当は適合できない彼らが悪いのではなく、ナイーブな人が入れない現代社会のほう狂っているのだ。大多数が正しいと思っていることが、常に本当に正しいわけではない。

ニートの彼らは現代標準の絶対論理、デジタル主義、科学技術的証明手続きに毒されていない。言い換えれば人間としてまだ「終わって」いないわけだ。この彼らにこそ今人類が必要としている革命、デジタルからアナログへ、絶対から蓋然へ、一神教の自然支配からアニミズムの自然との調和への大転換、パラダイムシフトを完遂できる潜在能力とエネルギーを有しているのだ。人類を「神の奴隷」から「貴族たち」に大きく転換できる素直さとエネルギーをまだ持ち合わせているのだ。

この大転換は革命と言ってよい。この革命だけが人間性を回復して人類を真に救済できるのだ。これを「ニート革命」と呼ばなくて何と呼ぼう。世界中の心あるニートたちよ、立ち上がれ。そして世界を大きく方向転換させよう。君たちならできる。そして出来るのは君たちだけだ。君たちこそ真のエリートだ。「キュリー夫妻はわき目もふらずに

研究に没頭しました」などと言う話が美德として語られる不毛な時代に終止符を打とう。棺桶に釘を打ちすえよう！

#### 41、愚民革命

「人の智恵なんておろかなのよ、愚かの方が偉いのよ」、これはキリスト教宣教師の決まり文句だ。そしてまじめな日本人は謙遜だから、つい「そうかも」と思い引き下がってしまう。そこですかさず宣教師は言う、「天のお父様にすべてをゆだねて救われなさい」と。而してそのセリフの本意は、「サルのような東洋人よ、我々西洋人の言うことを聞け」というわけだ。

こうしてフィリピン等お人よしなアジアの国々はキリスト教化され、あるいは植民地化された。アジアで欧米列強の植民地や租借地にならなかったのは、わずかに日本とタイ王国だけだ。はっきり言うておく、キリスト教はその本質において単に愚民革命である。リンカーン式に言えば、“by the idiot, of the idiot, for the idiot”と言うわけだ。

数で勝る愚か者たちをおだて上げつけあがらせて世の中をひっくり返し、自分のものになったら手下の愚か者たちなど簡単にお払い箱と言う手順だ。もっともあの単細胞な欧米人たちは自分たちが思っているほど利口ではなく、単に傲慢なだけだが。そしてこの愚民革命と言う本質は、キリスト教と双子の姉妹である共産主義にもしっかりと引き継がれている。「労働者の勝利」と言う奴だ。

キリスト教は一言で言えば壮大なウソだ。ウソの固まりだ。100%完璧に見え透いたウソだ。人を小馬鹿にするのもいい加減にして欲しい。キリスト教には何の神秘もない。単に拙稚な思想操作があるだけだ。つまりキリスト教は宗教としてはもっとも低レベルだ。いっそう宗教以下だと言ったほうが良い。宗教以下のものにマインドコントロールされるとはあきれてものも言えない。

そしてこのキリスト「教」が世界の人口の何と3分の1も占めている事実、私は地球文明の危機を感じずには居られない。宣教師と言うゴロツキどもがラウドスピーカーでがなりたてた「成果」だ。私はキリスト教を一切禁止した聡明な為政者である徳川幕府の慧眼に心からの賛辞を呈する。この慧眼のDNAを引き継いでいる限り、われわれ日本は安泰だ、油断はならないが。

#### 42、一人の小さな手



## 瞑想録（プレ3）

一人の小さな手 何も出来ないけど  
それでもみんなの 手と手をあわせれば  
何か出来る 何か出来る♪

敬虔な（実は陰気な）クリスチャン歌手の本田路津子さんの有名な持ち歌だ。誰でも知っている。そしてその歌詞の内容の無難さゆえに、子供たちの大会とかボランティアの集まりとかでよく歌われている。まさに現代の文部省唱歌である。

でもこの歌、本当に良い歌だろうか。私はひねくれ者なのかもしれないが、どうも良い歌とは思えないのだ。第一に中身がない。現実を遥かに上滑りした単なる概念的なきれいごとだ。こんなことで世の中の事件のただ一つでも解決できるというのなら、こんなおめでたいことはない。

いや、それを通り越して私はこの歌を聴くたびに馬鹿にされているとの感を禁じえない。「人の智恵なんておろかなのよ、考えない方が良いのよ」、そう促されているようだ。だからどうしろと言うのだ。天のお父様にすべてをゆだねて救われなさいとでも言うのか。これだから私はキリスト教が大嫌いだ。キリスト教はその本質において愚民革命であることを忘れてはならない。そしてこの本質は、キリスト教と双子の姉妹である共産主義にもしっかりと引き継がれている。

そして極め付けに、この歌には景色とか情景とか、情緒に訴える部分が完全に欠落している。だから私にとってこの歌は、イデオロギーのみの思想教育の歌なのだ。共産党の「インターナショナルの歌」に極めて近い、基本的に同じジャンルの歌だ。マインドコントロールを狙っている。この歌は東洋思想から見れば、出来損ないの程度の低いマントラだ。ちょうどあらゆる賛美歌がそうであるように。

日本の魂を持つ皆さん、こんな愚かな歌にうつつを抜かしてはいけません。国辱です。

### 43、これが一神教式の伝道だ

これは伝道です。テロではありません。多神教の日本人は分かりにくいかもしれませんが、これは典型的な一神教の伝道方式です。ムンバイのテロ、200人近くがまき浴いで死にました。いわゆるテロリスト、実際はムジャヘディーンと言って宣教者より上に位置づけられる殉教者なのですが、この近所迷惑無視の輩たち、彼らも教義に従ってほとんどが英雄的な死を遂げました。故郷では賞賛されています。これが伝道で



なくて何でしょうか。

こういう近所迷惑を顧みない、唯我独尊的な平然たる他殺行為、実は一神教では共通な方式で、従って犬猿の仲であったりするキリスト教でも一皮剥くところの独善がギラギラ有ったりするのですが、これが即ち一神教の伝道と言うものです。

実際彼らは、言挙げをしない（ことさらにかまびすしく宣伝をしない）多神教、つまり神道とか仏教とかヒンズー教とかの東洋系の宗教の穏便さの美德をあざ笑うかのように付け入って、ラウドスピーカーで自説をがなり立てて、根負けした人たちを強引に引きずり込んで数を増やし、得意顔をしてきました。

そして、キャバレーのポン引き同様に、中身は薄っぺらなのにただしつこさで勝負して、お駄賃をもらい賞賛を受けているのです。私にはイスラム教の方がまだ許せます。その影響力は限定的であるからです。絶対に許せないのはキリスト教です。他人の家に土足で上がりこんで、飴と鞭で、自分たちは絶対に変えずに、人に手前の流儀を強引に押し付けて勝ち誇る、あの図々しいキリスト教は私の目が黒い限り、いやそれより長く、永遠に許すことはないでしょう。

たしかに今はキリスト教徒がムンバイテロのようなものを引き起こしては居ません。それは彼らが誠実だとかあるいは自制心があるからではなくて、むしろ逆に小ずるいからです。紛争の地に巧妙に介入して、解決すると称して、その実自分流の押し付け以外一切許しませんし眼中にありません。加えて国連と言う、如何にも世界中立化の衣をまとった別働隊をうまく二枚舌で利用の上です。

皆さん、一神教、特にキリスト教に気を抜いてはなりません。彼らはとんでもない悪魔です。実際彼らは世界のほとんどを、かつては武力で、今は経済力で、支配し奪い押し付けてきました。キリスト教を禁止した聡明な為政者である徳川幕府の先輩にその慧眼を見習ってください。

#### 44、悲しいクリスマス

文化人類学者の中沢新一さんは「日本はキリスト教が伝道に失敗した数少ない国の1つである」と明確に断言し、高らかに宣言しています。全くそのとおりです。そして極めて喜ばしいことです。日本古来の神道や山岳信仰、更には日本人の自然を愛するアニミズム的メンタリティーが、キリスト教と言う創作宗教のウソっぽさ、にこやかな表面とは裏腹に他人に非寛容な狭量さ、そういった言葉で表せない不自然さを本能で

見抜いてはねつけたのです。ハレルヤ！

でも「日本が数少ない」と言うことは言い換えれば多くの国々が愚かにも祖先代々の信仰を捨てて、宣教師などと言うごろつきの舌先三寸にだまされて、傲慢で独善なキリスト教に転んでしまったということを意味します。今や世界の3分の1がキリスト教徒、キリスト教と双子の兄弟の共産党も加えると世界の2分の1、さらに犬猿の仲とはいえ同じく一神教のイスラム教も加えると世界の3分の2が一神教（一党独裁）と言う状況にあります。苦々しいことです。

つまり、これほどに世界の文化は一神教に圧殺されて、今や跡形もなく消え去っているのです。あの感性豊かなアフリカだって、今やキリスト教かイスラム教に二分されてしまっ、古代のダイナミックな信仰形態はほとんど消え去っています。中南米だって、オーストラリアや太平洋の島々だってそうです。上の写真はキリスト教を率先して祝うポリネシアの婦人たちです。完全に洗脳されてしまっています。この写真はJICA（国際協力事業団）の月刊誌から転載しました。

あの、恵まれた気候の下でゆったりと生まれては死んでいく、そういうのどこさを基本にした、ハワイとかイースター島とかタヒチ島とかから連想される昔からの彼らの伝統文化は、猿知恵に過ぎないキリスト教という下等な宗教によって殺されてしまいました。今や地球上の宗教文化は死骸の山で、危機的状況、がけっぷちです。私はこの写真を見たとき、悲しさを超えて、怒りに打ち震えました。

キリスト教というバイ菌は、どこまで地球の豊かさを食い尽くして、鳥インフルエンザのようにはびこりきれば気が済むのでしょうか。どうして国連はこの由々しき自体に、見て見ぬふりをしているのでしょうか。もう時間がありません。皆さん、今すぐ立ち上がらないと地球文化はキリスト教と言う厚顔無恥な「宗教」の餌食になって滅亡してしまいます。キリスト教に勝てるのは日本人だけかもしれません。あいつらを水際で食い止め、且つまずアジアの国々に、「祖先の信仰文化に帰れ」と呼びかけようではありませんか。

#### 45、ラーメンが日本を守る！

日本にはこの上なく美しい、四季折々の自然があります。山と言ひ川と言ひ海と言ひ、更には盆栽やちょっとした箱庭に至るまで、日本はめくるめく美しさに満ちています。日本人は古来よりこの美しさの中に生きてきました。そしてその美しさによって感性を研ぎ澄まされてきました。それは一部のエリートに限られることなく、世代々万人に

受け継がれてきました。

日本は「うまし国」です。「大和しうるわし」です。このえも言えない美しさが日本人をして、国土愛、郷土愛、祖国愛を育んできました。強制されることなく自然に日本を守ることに命を懸けるのです。それは古くは古事記、日本書紀に始まり、神道として、あるいは国学として受け継がれ、整備されてきました。源氏物語や万葉集と言った文学も忘れてはなりません。短歌や俳句然りです。

しかし思うに、歴史書、国学、文学、俳句、古典芸能、雅楽と言ったものは必ずしも万民の得意とするところではありません。むしろ一部の風流人の愛好するところとなりがちです。にもかかわらず日本人としての侘びさびや微妙な美しさ、素晴らしさを愛する心は、あまねく万人に行き届いています。

思うにその日本特有の美の万人への担い手、それは万人が参加できる場所の「味」にあります。食べ物は万人共通です。そして日本の食の味のデリケートさは世界に類を見ません。刺身然り、お吸い物然り、京の「おぼんさい」然りですが、ここで万人のものと言うことになると、やはりその典型は庶民食の代表であるラーメンではないでしょうか。

ラーメン：麺、たれ、チャーシューその他の総合芸術であるラーメンの多様さ、繊細さは、その道を極めつくすことなど永遠に出来ないほどです。例えば「ラーメン選手権」、日本人の美的感覚を楽しく養うのに、これ以上の祭り、催しは考えられません。TVチャンピオンの力は偉大です。

実際馬鹿の一つ覚えでステーキしか食わない、そしてすし屋のお吸い物を「ただの湯」だと思えない、単細胞の欧米人と比較すれば、日本人が如何に繊細であるかが分かるというものです。そしてこの多様な繊細さが日本の八百万の神につながり、欧米人のワンパターンさには一神教が口に合うという構図になっています。

世界中を見回したときに、欧米流の基督教のラウドスピーカーの音量に任せた下品な伝道が成果をあげて、世界の文化を潰してきました。でも欧米流の賭場経済、下等文化は今まさに破綻しています。今こそ日本が八百万の繊細さを世界に、言挙げせずに自然な態度で教えるべきです。日本は基督教の伝道師たちのパフォーマンスをうそ臭いと直感して、これまでずっと跳ね返してきました。

オバマが「小さい米国」を目指して大政奉還する今年こそ、日本発の平成維新の始ま

る年です。そして平成維新のシンボルは、俳句や古事記もありますが、より広くはラーメンです。ラーメンが異教徒から日本を守りました。そしてこれからも守っていくでしょう。ラーメン店主の真剣な顔は、いちいちにやけている大学教授と対極で、求道者の面持ちです。ラーメン芸術に万歳！

宣教師たちとやら、日本に来て「敵を知り」たかったら、ラーメンの食べ歩きをしなさい。我々はいつでも受けて立ってやる。ラーメンこそは短歌俳句の庶民版だ。TVチャンピオン万歳！庶民的分野の様々な奥深い競技会万歳！ラーメンこそは万人に出来る俳句で、日本の救世主だ！

#### 46、蓋然論理の浸透的性質

本日は、先日口火を切った蓋然論理の浸透的性質についてもう少し掘り下げます。

例えば明治神宮に行きたいとします。そして「渋谷駅から送迎はありますか」と問い合わせたとします。この問い合わせに対して、「ありません」という答えは正しいです。少なくともデジタル的な確定論理では完璧に100%真です。真偽のイエスかノーかを問題にする論理では、これは100点満点の正解です。

でもこの答えは何か機械的で、木で鼻をくったようで、親切心とか思いやりを感じません。つまり日常生活のほとんどの局面において、真偽は実は最重要課題ではないのです。一番大切なのは相手の立場に立つことです。その点からは「隣の原宿駅からなら送迎がありますが」と答える方がありがたいし、よっぽど気が効いています。

つまり、質問に対してそれを直球で受け取るのではなく、より幅を広げて、つまり問題の境界領域を超えてその外まで浸透する心がけがより適切なわけです。日常の仕事ややり取りでもそうでしょう。かように質問を柔軟に解釈するにはもちろん、かなりの智恵を使う必要はありますが。

そして蓋然論理の重要性もまさにここに 있습니다。あいまいさをうまく生かすと、より幅が広く智恵があり、しかも相手の気持ちにしみ込んでこれに答える機転が沸いてくる。人の智恵とはこのように隣人の幸せを目的として使うように授けられたのだと思いませんか。

そしてそこで大切なのは単なる真偽でなくむしろ浸透力で、その浸透力を扱い鍛えるのが蓋然論理であります。今の義務教育は西洋かぶれしていて、蓋然論理を教えない

さ過ぎます。その結果人と人との関係がぎすぎすしています。

#### 47、蓋然論理式「なにをやるか」

この辺でまた、本業の蓋然論理に戻ります。本日の問いは「やるべきことが分からないときはどうしたら良いか」です。この問いを例に、蓋然論理式に考えてみましょう。

まず、「やるべきことが分からない」と言っても色々なケースがあり得ます。

- 1、やるべきことが何も見つからない、つまり1つもない。
- 2、やるべきことが多すぎて、どれからやるべきか迷ってしまう。
- 3、やるべきことは分かっているのだが、できる状況にない、必要条件が揃っていない。  
（例えば：彼女が振り向いてくれないとか資金が足りないとか）

で、このうち「ケース1」について、以下は蓋然論理式の答えの例です。

- 1、何もしない。ただこれは、「しない」と言う行為を積極的にしている（選択している）とも解釈できることに注意してください。
  - 2、たまたま手元にあった本の適当なページを開いて、そこに書いてある通りにやる  
（この答えは冗談ではなく、ある有名なヨガの先生のまじめな答えです）。
  - 3、サラリーマンになる。
- まだ他にも色々あるでしょう。多様性こそ蓋然論理の際立った特徴だからです。

さて、このうち最後の答えですが、多少解説をつけます。この回答が一番意外で構成論的だからです。今はたまたま時代が悪くて、正社員になれたら御の字なのですが、サラリーマンは今後、会社の大小や業務内容を問わず、やるべきこと、自分の天命をまだ見つけられない人が、自分探しの傍らに予備軍的に時間稼ぎをしながらやる種類の仕事になります。

そして運悪く見つけられずにずっと会社員でいてついに定年退職までにもなってしまった人は、できれば第二の人生にかけたいですが、一生見つからない可能性もあります。保障はありません。あくまでも蓋然的だからです。一生見つからない人、会社ではせいぜい子会社の部長くらいになる程度の自主性の無い凡人が多いのですが、そう言う人は毎日テレビでも見て人生を終えなさい。

#### 48、蓋然論理の展開の道具

さて、蓋然論理を適用するとして、思索の手助けとしてどのようなツールがありうるの



だろうか。ちなみに確定論理では、理論、実験、数値計算（計算機）の3点セットであった。

このうち、実験と数値解析はそのまま蓋然論理の道具になりうる。例えば顕微鏡とか試験管とか電流計とかスーパーコンピュータとかだ。これは、論理がどの論理であれ、実験や数値解析の結果の解釈上の手続きの違いに過ぎないからであるのが理由である。

しかし、確定論理の3つの手段の内残りの「理論」については直ちに蓋然論理に横流しできない。確定論理の理論は推論過程に蓋然がかんでいない、つまり無謬であることが建前だからである。言い換えればつまり、蓋然論理の方が確定論理を極端な場合として含んで、かつ遥かに広いのだ。だから内包はできても外延は出来ない。

ただし、理論と言うものが天気予報を例にとると、以前の理論予想のときはほとんど当たらなかったものの、数値予報になってかなり良く当たるようになった事実を見ると分かります。出来すぎた世界の産物で余り現実的でない。理論とは多分にこのようなものだ。ただ、蓋然論理には確定論理とは違った意味での「理論」が存在しうるが。

もう一つ注意しておきたいのだが、数学とか哲学とかを除いた、工学とか農学とか医学とかのいわゆる実用の学においては、実は蓋然定理とみなした方が適切なものが既に多く紛れ込んでいる。経験とかコツとか実績とか言う種類のものだ。例えば工学では具体的な根拠が示せないときは「工学的判断により」という理由付けをする。「カンジニアリング」とも言う。典型的な蓋然論理である。

さて、蓋然論理の広さ、融通無碍具合を知ってもらうためには、従来の確定論理との比較を行う以上に、固有にあるいは純粋に蓋然な物を列挙する方が分かりやすいだろう。先にも挙げたが感とかコツとか技とかそういったものの具体的表現である。またぎや大工の世界でもある。

確定論理は特に数学において緻密な世界を構築したが、現実とはまるで乖離して単に高等なサル知恵の輪になっている。蓋然論理固有の世界の構築は、今後最も重要な課題の一つだが、現実を離れた単なるお遊びとしての緻密な世界は、作ろうと思えばやはり出来るのだが、不要と考える。

むしろ、蓋然論理が固有に多様性を指向することから、統一原理よりは世界の多様性の贅の面白さを伝達できるようなローカル法則群が主力となるであろうと予測して



いる。蘊蓄のようなものだ。

#### 49、蓋然論理と文学

さて、論理に蓋然性を許すことにより、論理の作用対象はとてつもなく広がることをすでに見てきました。ことわざとか、占いとか、疑似科学とか、多義な事項とか、予言とか、超能力とか、コツとか勘とか、これらのすべてではもちろんありませんが、これらの分野に新たに光を当てられるのは、便利で且つ知的冒険としても楽しいものです。

ではここで調子をこいて、確定論理の対象である科学技術と対極にある文学や芸術や芸能について、もちろん確定論理の遥かに及ぶところではないのですが、蓋然論理ならば果たして及びうるのか検討してみるのには意義のあることで、蓋然論理に対する大きなチャレンジであるともいえます。

まず言えることはこういった分野、極めて創作性の高い分野ですが、その創作の仕方について一般的に言われている経験法則、「正義は最後には勝つ」とか、「一旦はほとんど悪が勝ちそうになる」とか、「和音を展開していくと良い曲が作れる」とか、「常識をあえて覆すと笑いが取れる」とか、こういった「決まり手」についてはもちろん蓋然法則であって蓋然論理が適用可能です。

しかしながら文学や芸能の醍醐味はそこにその中心があるのではなくて、むしろ意外な展開や主人公の不憫さ、思わず感情移入してしまう場面設定とかにあるわけです。文学の中でもバサラ性が高い江戸文学、歌舞伎とかが典型ですが、例えば「八犬伝」で、犬の付いた全く異種の人々が8人集まって城を攻めて宝を取り返すといったそういった場面設定・推移には驚くほどの智恵と気付きが感じられます。

ただ、そこには「〇〇ならば××である」という形式がないため、「論理」とは言いにくいわけです。つまり論理ではないけれど極めて創発性が高いものがここにあるわけです。そして、そもそも人類の創発性を求めて、蓋然論理とアナログ集合に行き着いたことを思い起こせば、ここは「文学の主要部は、創発性は高いけれども蓋然論理ではない」と片付けるよりは、蓋然論理を更に一般化することにより、芸術における究極の創発性を操作・評価できる系統的手段が欲しくてたまりません。

今日は問題提起だけで終わってしまいました。

## 50、蓋然論理と芸術

先日JR鶴見駅のコンコースを歩いていたら、津軽三味線を持ったストリートミュージシャンが演奏をしていた。なかなか乗った演奏で、演奏している方も楽しくてやっているようで、癒しがあった。

そのお兄さんとしばらく話をしたのだが、津軽民謡は一般に、骨の部分の主旋律はほぼ決まっているものの、肉というか細かいアレンジはそれこそ弾き手の自由で、いかようにも自分の解釈を入れられ、むしろその解釈の良し悪しで演奏の評価が決まるということだった。この話を聞いていて私はなるほどと思った。自分のライフワークの「蓋然論理」に関して、ある重要な気付きがあったのだ。

この際白状しておく、蓋然論理に関する気づきは音楽とか陶芸とか料理とか俳句とか、そういった芸術系の作業をしているときにほとんどだ。逆にもっとも気づきに至らないときは、数学や物理や哲学の本を読んでいる時なのだ。結局これらはもう死んでいるということだろう。

さて、このときの気づきとは、「音楽は古今東西を問わず、骨の部分は決まっていた（不変量）、肉の部分を自由に、したがって多様に付けられるところが面白いのだ」と言うことである。

更には「このコアとなる不変量とその周辺での多様性の組み合わせこそが、音楽に限らず、文学を含むあらゆる芸術に、更には歴史を含むあらゆる社会科学に、もっと更には日常のあらゆることに共通の一定の世の中のありようではないか」と言うことであった。

つまりこの、「不変量と多様性の気味の良い混在」こそが、蓋然論理から自然に導かれる世界観なのだ。言い換えれば、蓋然論理はかようにも人に自然な論理だったのだ。

宇宙の進行は運命論でもなければその逆の未来未定論でもない、人の努力が無意味でもなければ万能でもない、そういう極端なものではなくて、むしろそれらが程よく混じった、ある種中庸に位置づけられるものなのだ。

そう気づいたとき蓋然論理が実に宇宙ほど広大無辺なものに感じた次第である。

## 瞑想録（プレ3）

（本論は以上です）